

87 いりさわやき ちゃつぽ
入沢焼茶壺



指 定 市有形文化財 昭和63年 4月18日
所有者 佐 久 市

この茶壺の作者加藤甚左衛門は、岐阜県可児郡高田村（現多治見市）の出身で、その家系は、室町時代後期における美濃窯中興の祖で、天正2年（1574）織田信長に瀬戸焼の茶器を献上し、お墨付けを拝領した作陶家、加藤景光^{こうえい}10代の後裔である。

指定の茶壺は、明治のはじめ、入沢の土を用い、入沢に築いた窯で焼いたものである。高さ50cm、口径33cm、胴周り1.14m、底径19.5cmの黒色灰釉の製品である。

加藤甚左衛門は、天保10年（1839）に生まれ、文久年間父の死後家業をついで一家をなし、元治元年（1864）伊勢藤堂家に召され抱え工となった。廃藩と同時に美濃へ帰り家業を続けていたが、明治12年（1879）新しい陶土を求めて甲州や佐久などを転々とした後、入沢に転住し陶業を再開した。

窯は三連房の本窯一基と、素焼窯一基を築き、作陶に専念した。製品は主として、茶壺・水がめ・漬物などのかめ類と、すり鉢・火鉢・植木鉢等であった。また床置なども作っている。これらは皆すばらしい作品である。

作品は土目も粗く、小石まじりの地元の粘土を用いているため、厚手で肌目も粗く重量感がある。そのため、素朴で重厚な感じのする焼物であって、後世、入沢焼と呼ばれるようになった。

なお、佐久穂町大日向矢沢にある不動明王像は等身大の大作であり、芸術品としての価値も高い。